(19)

氏名（生年月日）　太田　英樹（オオタ　ヒデキ）
本　　籍
学位の種類　医学博士
学位授与の番号　乙第 206号
学位授与の日付　昭和50年7月11日
学位授与の要件　学位規則第5条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目　**虫垂炎におけるリンパ濾胞肥大の意義に関する臨床並びに病理組織学的研究**
論文審査委員　（主査）教授　織畑　秀夫
（副査）教授　今井　三善，教授　石津　澄子

論文内容の要旨

研究目的

虫垂炎において，リンパ濾胞の変化が果たす役割については，内外多数の研究報告をみるが，未解決の部分が少なくない．そこでこの問題解明を目的として，当教室において行なつた虫垂切除例について，次の如き方法で臨床病理学的研究を行なつた．

研究方法

急性虫垂炎の診断の下に切除された虫垂 104例および開腹時合併切除を必要とした虫垂炎と認められない虫垂19例について，リンパ装置の肥大と炎症の有無に重点をおいて，病理組織学的検索を行なつた．その中のリンパ濾胞肥大のあるものについては粘膜固有層，リンパ組織，およびリンパ濾胞の面積をプラニメーターで測定し，その合計面積に対するそれぞれの比率を算出し，グラフに表わし，疼痛その他の臨床所見との関係を検討した．

成績および結論

1．切除虫垂は病理組織学的所見にもとづき次の3型に分類した．

(1)　リンパ濾胞肥大型：明らかな炎症像は欠如しているが，リンパ濾胞の肥大が認められるもの．25例．

(2)　リンパ濾胞肥大＋炎症型：リンパ濾胞の肥大に炎症が加わつたもの．23例．

(3)　炎症型：リンパ濾胞の肥大は認められず炎症のみが存在するもの．56例．

なお対照虫垂19例の約1/3 にリンパ濾胞の肥大を示すものがみられた．また (2)，(3)型については疼痛の原因は炎症にもとづくものと考えられたので，前述の組織計測は行なわなかつた．

2．明らかな炎症像を示さないリンパ濾胞肥大型25例の臨床病理学的研究結果

(1)　従来の多くの報告によれば，この様な場合の一部は糞石，糞塊による虫垂内腔の閉塞が虫垂炎における疼痛の主因であると言われているが，本研究におけるリンパ濾胞肥大型の内，疼痛の強い8例に糞石，糞塊を認めたので，この糞石，糞塊が疼痛発現に大きい役割をもつていると考えられる．

(2)　糞石，糞塊を認めない例における組織計測値と疼痛との関係について検討を行なつた結果は次の如くである．

i）疼痛の強い8例では粘膜固有層比の増大が著しい．したがつてこの場合の疼痛の原因は粘膜固有層の増大による虫垂管腔圧の上昇によるものであると考えられた．これは炎症の初期像ともいえる．

ii）疼痛が比較的弱い6例ではリンパ装置比が大きい．したがつてこの場合の疼痛の原因として，従来の説のように，リンパ装置の発達による虫垂管腔圧の上昇が考えられるが，対照例においてもこの程度のリンパ装置比を示すものがあることを考えあわせると，これのみが疼痛の原因とは考えられない．

iii）疼痛の非常に弱い3例では特にi），ii），の特徴は認められなかつた．

論 文 審 査 の 要 旨

本論文は，虫垂炎におけるリンパ装置の肥大と炎症の有無に重点をおいて臨床および病理組織学的に切除虫垂について検索を行なつたもので，虫垂炎の手術の適応を決める上に意義を有し，学術上価値あるものと認める．

主論文公表誌

虫垂炎におけるリンパ濾胞肥大の意義に関する臨床ならびに病理組織学的研究．

東京女子医科大学雑誌　第45巻　第2号 143～165（昭和50年2月25日発行）

副論文公表誌

1）成人性肥厚性幽門狭窄症の1手術例．

東女医大誌　**42**（4）　306～312（昭和47年）

2）インドネシアにおける1年間の診療報告．

東女医大誌　**42**（7）　524～530（昭和47年）

3）胆石イレウスの1治験例．

東女医大誌　**44**（7）　609～614（昭和49年）

4）虫垂粘液嚢腫の1治験例．

東女医大誌　**45**（2）　186～189（昭和50年）

5）小児の膀胱に発生した原発性横紋筋肉腫の1例．

東女医大誌　**45**（7）　622～626（昭50）